

住み慣れた家での一人暮らしに不安を覚え、「ついのすみか」をどこにするか、思い悩んでいる友人が数人いる。80歳間近の女性たちである。

これまで多かつたのは、子どもの家に移り住み、同居することだった。しかし、それだけは避けたいと考える人も増えている。子どもとの途中同居が必ずしも幸せをもたらすものではないと知っているからだ。

広島の娘夫婦の家に、関西から移り住んできた女性(82)の悩みを聞いた。

「一人で住むのが心細くなって、娘夫婦と暮らし始めたんだけど、1人の時より寂しい。前の家には友だちがしょっちゅう遊びにきていたし、隣近所になじみの人もいた。けど、こっちは誰もいない。80歳過ぎから友だちをつくること

子どもとの途中同居 1人の時より「寂しい」

なんて無理。足が弱って外出も自由にできないんだから。何が一番寂しいかと言うと、『寂しい』と言う相手もないこと。娘に言う『そんなこと言ってもしょうがないでしょ』『何が不満なの、わがまま言わないで』とすぐにけんか腰になるし。以前の娘は優しくったのに」

家を手放し、友人を失った親が寂しさを訴えるのは当然のことである。しかし子の方からすると、それは親の諦めの悪さとも思える。自分の努力不足を責める声にも聞こえる。そもそも親子は愛や思いやりを期待し合う関係で、だからこそ、同居することで親は深く傷つき、孤独感やわびしさを味わう。

子どもとの途中同居を後悔するのは、この女性だけだろうか。

少し古いが、1993年の東京都町田市の調査を紹介しよう。「呼び寄せ老人調査」とも呼ばれるこの調査は、子どもに移り住んだ高齢者の43%が寂しさを感じ、32%が「以前の居住地に戻りたい、しかし戻れない」と感じている事実を報告する。

この調査から20年余り。高齢者の個人意識と自立志向は、当時より強まっている。とすれば、「子どもとの同居だけは避けたい」、「『在宅ひとり死』のリスクがあっても一人暮らしの方がまし」。そう考える高齢者が増えていて当然といえる。

(臨床社会学者 二井日市市)



絵・トウフクロ

H26.4.26 (金) 中国新聞